

お知らせ



注目される非接触型情報提供

ミュージアム展示ガイド「ポケット学芸員」導入事例集 発行のお知らせ

弊社関連会社である株式会社ミュージアムメディア研究所では、このたび「ミュージアム展示ガイド『ポケット学芸員』導入事例集」を発行いたしました。

本書は、ポケット学芸員の活用現場をレポートするオリジナル冊子です。新型コロナウイルスの感染拡大以降、ガイドツアーやギャラリートークといった対面型の展示案内だけでなく、貸出用音声ガイドやタッチパネル端末など接触型機器の使用も困難になる中、ポケット学芸員についてのお問い合わせが急増していることを受けて、緊急発行いたしました。

2016年からサービスの提供を開始したポケット学芸員は、各ミュージアムがそれぞれ工夫を重ね、個性豊かなコンテンツを配信中です。すでに多数の館が新型コロナウイルス対策として「非接触型の情報提供」を実現し始めていることから、その事例を紹介することで「対策集」になり得ると考え、急ぎ制作したのが本書となります。

飛沫感染・接触感染の防止という大前提のもと、来館者の安心と満足と同時に実現するには、何が必要なのか。印象的なアプリ活用アイデア、あるいは企画の実現に向けた関係者の努力の足跡なども含め、いま知っておきたい「ミュージアムの共有アプリ活用」をワンストップでお伝えする、ヒント満載の総集編型レポートブック。本書が博物館及び関連施設・機関の皆様に、少しでもお役に立てば幸いです。



発行／株式会社ミュージアムメディア研究所
A4判 モノクロ 80ページ

【特別寄稿】逸翁美術館・小林一三記念館でのポケット学芸員スタートに当たり 【特集】特徴的なアプリ活用法 「参加型アプリ」という新しい戦略(神奈川県立歴史博物館)／「プロの技」で付加価値を高める(中原中也記念館)／「ご本人登場」のサプライズ(九州産業大学美術館)／館内のバリアフリーにアプリを活用(高松市讃岐国分寺跡資料館)／アプリからデジタルアーカイブへ(草津市立草津宿街道交流館・史跡草津宿本陣) 【再録】先行ミュージアム訪問 導入館インデックス 導入効果レビュー 【考察】「共通アプリ」の可能性

なお、本冊子は、博物館関係者に限り無料にて配布いたします。弊社ホームページの「資料請求」コーナーよりご請求いただけますので、お早めにお申し込みください。



編・集・後・記

今回掲載した小松市立博物館の事例では、地元の学生さんがアルバイトとしてデータベースづくりを担いました。以前、音声ガイドのナレーションを高校生が担当した事例もご紹介しましたが、積極的に外部の方々に協力を仰ぐ姿勢は、これからのミュージアムにとって、とても大切な要素になるかもしれないと感じています。

これまでも、友の会組織などを通じて地域の方々が博物館活動に参加するケースはありました。しかし、誰もがSNSで並列的に発信できる現代は、ミュージアムも居並ぶ形で公式チャンネルを設け、手元のスマートフォンで多様な情報にアクセスしてもらう環境が整っていま



www.facebook.com/wasedasys
早稲田システム開発株式会社

す。デジタルツール、デジタルチャネルの発展とは、そんな「緩やかな入り口」が自然に増えていく状況を意味するようにも思うのです。

現在リニューアル休館中の沖縄・名護博物館でのことです。休館前にお邪魔したある日、下校途中の小学生たちが敷地を通り抜けながら学芸員と元気に言葉を交わす姿を見かけました。ミュージアムは地域に身近な施設なのですから、フラットに話せるデジタルの場をうまく使えば、もっと気軽なコミュニケーションが広がっていくはず。コロナ禍で「密」が気になる今日この頃ですが、心の距離は「近さ」を維持していきたいものです。

MAPPS press

News Letter from MAPPS

2020.11

No.15

頑張れ、ミュージアム。



ミュージアムIT屋さん
現場を往く

「建築探訪」も ミュージアム巡りの魅力

世界を見渡せば、その外観のみを集めた写真集をシリーズで発行できるほど、魅力的な建物のミュージアムは数え切れないほど存在します。著名建築家の手による「作品」も魅力的ですが、歴史的建造物が上手く活かされている館は特に印象に残るものですね。

中でも、「昔は銀行だった建物」は、重厚感も格別です。ここ、敦賀市立博物館では、昭和2年(1927年)に旧・大和田銀行本店として竣工した建物をそのまま利用中。北陸初となったエレベーターやレストラン、迎賓館なども備えていた名建築で、平成29年には国の重要文化財に指定されました。大理石のずっしりとした質感が楽しめるカウンターの中の常設展示スペースでは、当時の空気を感しながら貴重な資料を閲覧可能。この空間で見ると、同じ資料でもひと味違う重みを感じるよう

な、そんな贅沢な気分に入れます。

もうひとつ、北海道小樽市の小樽芸術村にある似鳥美術館の建物は、旧・北海道拓殖銀行小樽支店。地域経済が絶頂期を迎えた頃に建設された建物ですが、このエリア帯は銀行各行の小樽支店が集中し、「小樽銀行街」とも呼ばれていました。館内にはそんな時代の薫りが色濃く漂い、エントランスホールの



敦賀市立博物館

6本の古典的円柱やステンドグラスはまさに圧巻の美しさです。

歴史的建造物の維持には大変な労力が伴うことと思いますが、訪問する身にとっては、その地の往時の姿に思いを馳せる格別なミュージアム体験となります。こうした素晴らしい建築物が、「生きている状態」で次世代に継承されることを願うばかりです。



似鳥美術館

CONTENTS

ミュージアムIT屋さん、現場を往く！
「建築探訪」も
ミュージアム巡りの魅力

ミュージアムリサーチャー
学生支援策が地域の文化資産づくりに
小松市立博物館の取り組み

ミュージアムITトピック
「いま、そこにあるIT」を活用する時代へ

新機能情報
ポケット学芸員 2施設目以降無料サービス

お知らせ
ポケット学芸員 導入事例集 無料配布中

福井県・敦賀市立博物館
北海道・似鳥美術館

ミュージアムリサーチー



コロナ禍での学生支援策が、地域の文化資産づくりに。 石川県小松市／小松市立博物館の取り組み



経済活動や社会生活にも甚大な影響を及ぼした新型コロナウイルス感染症の猛威。旅行業界とともに特にダメージが大きいとされる外食産業では、飲食店のアルバイト収入に頼る多くの大学生たちの困窮も大きな問題となりました。

ここ石川県小松市では、そんな彼らを支援すべく、市立博物館でのアルバイトの募集を開始。どちらかと言えば救済色が強い事業かと思いきや、これが予測していなかった大きな実りをもたらしたのです。

新型コロナウイルスで困窮する 学生を支援するために。

それは、小松市の和田慎司市長の提案から始まったそうです。新型コロナウイルス感染拡大による経済活動への影響は、もちろん小松市の経済活動にも深刻な影を落としています。事業者や生活者の支援に追われる中で、「学校に通えない」「アルバイトもできない」という学生たちにも、市として何かサポートしてあげられないか

…。そんな小松市の大人たちの想いから、「博物館でアルバイト」という学生向けの施策が立ち上がりました。

一方、舞台となる小松市立博物館では、今年の春に市制80周年を記念する企画展「写真が語る小松80年の記憶」を開催していました。ベースとなったのは、市の広報課が保管していた大量の写真。平成後半のものを除く大半が紙焼きのままといい状態だったのですが、これをスキャンして約6,000枚もの画像データを作成しました。

緊急事態宣言の発令による臨時休館があったものの、明けてからは会期を延長し、展覧会は無事に終了。これを機に画像データをデータベース化できればよかったのですが、コロナ対策などで館職員は多忙を極め、そのままサーバに保存するの手いっぱいでした。そんな中で救世主となったが、前述のアルバイト学生たちです。

せっかく来てもらうなら…と、二木裕子館長は考えました。現在利用中の収蔵品管理システム＜I.B.MUSEUM SaaS＞

で画像をデータベース化し、さらにインターネット上で公開する。この作業を学生さんたちに手伝ってもらえれば、博物館の情報発信の強化にも役立つかもしれない。こうして、学生支援策の中身が固まりました。

学生の奮闘で、 6,000枚の写真を開く。

採用した2名の学生アルバイトは、6月から8月にかけて、土日に博物館に来て作業にあたりました。一人は地元出身で他地域の大学に通う男子学生、もう一人は岡山県出身で公立小松大学に通う男子学生という組み合わせです。博物館としても、システムへのデータ登録を学生アルバイトに任せるのは初の試みで、マニュアルなどは未整備。そこで、担当者と学生が話し合いながら作業方法を模索していくことになります。

作業内容を具体的に見てみましょう。まず、画像データが表示されたWindows Explorerの画面をそのままプリントアウトします。写真についての情報はファイル名に含まれているので、それをMicrosoft

Excelでリスト化する作業を行います。この際、「小松市80年のあゆみ」展で担当者が作っていた各写真の解説文をExcelに入力。ある程度まとまってきたら＜I.B.MUSEUM SaaS＞にアップロード。Explorerを画像表示に切り替えた画面と、先のプリントしたものをチェックツールとして活用し、画面上で写真データと文字情報を確認し、画像データをひとつずつアップしていったそうです。

長年の住人と新たな転入者。彼ら2人にとってはいずれも「地元」ではありませんが、古い地名などは馴染みがありません。このあたりは、館長や学芸員のサポートを仰ぎながら少しずつ作業が進み、ついにデータベース化が完了。約6,000点もの地元の懐かしい写真の数々は博物館の資料データベースの中で公開されました。また、その一部は街歩き用地図アプリ「にっぽん風景なび」用のコンテンツに組み込まれるなど、さらなる成果を呼び込みました。

お手柄の学生たちは、「学校と家の往復では市のことを知る機会が乏しかったが、このアルバイトを通じて市の歴史をリアルに学ぶことができた」と満足げな表情だったとか。「博物館でアルバイト」という救済

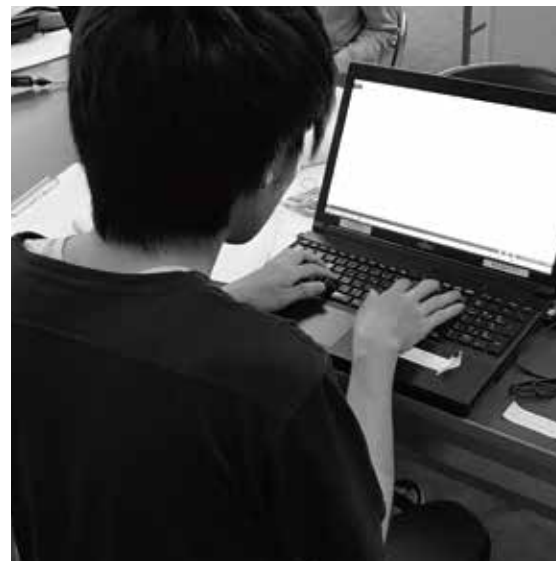
策は、普通のアルバイトでは得られない体験となったわけです。彼らは、アルバイトを通じて使用したデータベースの運用について、とても建設的な提案を含んだレポートも提出してくれたとか。博物館にとっては、完成されたデータベースだけでなく想定外の財産まで得たことになります。

学生たちの成果を、 文化資産として地域へ活かす。

現在、博物館では、学生が残した写真データベースという資産を効果的に活用するいくつかの方法を検討しているそうです。たとえば…。

●ホームページと データベースでの「特集」

今回の写真は、現在は博物館の収蔵品データベースの一部と位置づけられていて、すでに登録済みで公開されていた写真とともに公開されています。そこで、まずは今回の写真を対象に「写真が語る小松80年の記憶」といった固有のキーワードを付与し、検索・抽出しやすく整えます。さ



らに、テーマや年代などで絞り込むことができるようデータを整備していくことを検討中とのことでした。

同時に、ホームページでは「市庁舎」「芦城公園」といったテーマを設定し、検索結果としてまとめて呼び出すことで「特集」コンテンツを創設することを検討中。テーマはたくさん挙げられるので、連続コラムのような方法で発信していくこともできそうです。これなら、今回の写真データをより気軽に楽しんでもらえるのでは…という期待も高まります。

●街歩きコンテンツとしての改善

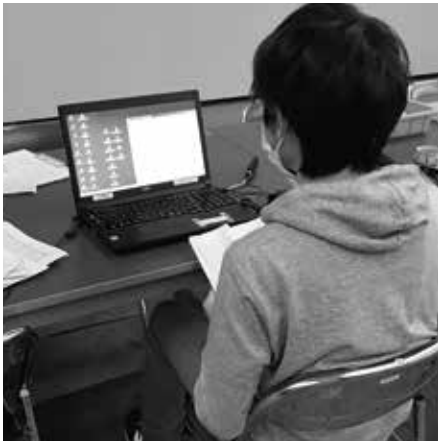
すでに街歩きアプリ「につぼん風景ナビ」で写真を配信しているものの、アプリの仕様に、6,000枚を公開するとアプリ上の地図がびっしり埋まって見づらくなってしまうため、現在は写真を厳選して配信しています。しかし、ホームページに地図のコーナーを設け、テーマごとに切り替えるような機能を搭載できれば、より多くの写真を地図上で紹介することができるようになります。何しろ数千枚規模の写真ですから、テーマごとに上手に分けて地図に置



いていけば、「昔の写真を見ながらの街歩き」をたっぷりと楽しめるコンテンツになるのではないのでしょうか。

●ワークショップで「いま」との対比

さらに、博物館のワークショップでも活用できます。昔の写真の場所に出向き、その場所の現在の写真を撮影してデータベースにアップすれば、昔と今を対比するコンテンツにアップグレードできます。ワークショップ参加者も、昔の写真を見ながら同じ場所を見つける楽しみに加え、自分が撮影した写真が博物館のデータベースで公開されるわけですから、参加の際の充



実感は一層高まるはずです。博物館業界の内部からの視点で見ても、データベースがそのまま「利用者参加型コンテンツ」になるという全国的にも珍しい運用が可能に。地域や利用者により密接な関係を築くことができる施策となり得ます。

現時点ではアイデア段階ではありますが、このように、アルバイトとしてやってきた学生たちが工夫を重ねて残してくれたデータは、地域と博物館にとってより大きな可能性を秘めた財産となりました。コロナ禍の学生支援策が生み出した成果が、今後、どのくらい大きな果実へと成長するのか。楽しみは膨らむばかりです。

 **小松市立博物館**
<http://www.kcm.gr.jp/hakubutsukan/>

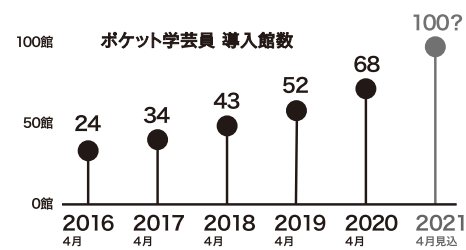
ミュージアム IT トピック

ITは道具。作るのではなく、使うもの…。 「いま、そこにあるIT」を活用する時代へ

「I.B.MUSEUM SaaS」のユーザ向けアンケートでは、今年に入って新しい情報発信を開始したと答えた館が、実に全体の4分の1に達しました。TwitterをはじめとするSNSの活用が目立ちましたが、これは費用をかけずに迅速に立ち上げることができる点が大きいのでしょう。かつてのミュージアムのIT活用では、仕様を検討し、開発業者を選定して発注するのが一般的でしたが、今後は「いま、そこにあるITツール」をすぐに使えるか否かが重要になるものと思われます。

では、よりスピーディにIT活用を実現するには、どんな方法があるのでしょうか。前述のアンケートの回答館のうち、Facebook を利用している館は全体の66.3%、Twitter は52.5%、Instagram も26.7%に達しました。これらはいずれもコストをかけずに実行できる情報発信方法。公式チャンネルを運用するための館内手続きさえクリアできれば、今すぐにでも導入できるIT活用法です。

ご存じの通り、I.B.MUSEUM SaaS には「ポケット学芸員」をはじめとするいくつかの連携アプリが付属しています。I.B.MUSEUM SaaS 本体を導入していればすぐに始めることができる情報発信手段のひとつですが、事業スケールとしては大手SNSの足もとにも及びません。とはいえ、それでも最近のポケット学芸員の導入館増加は著しく、来春には100館に到達する見込みとなりました。

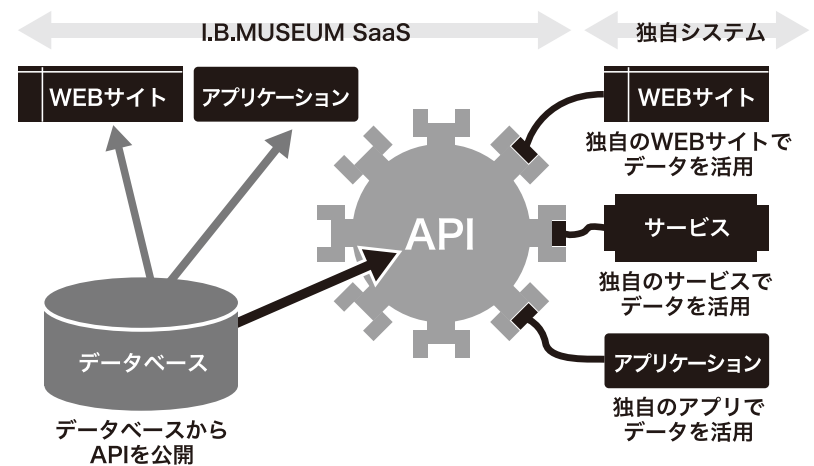


情報の流通を促進する「API」の魅力とは

話は変わりますが、API(Application Programming Interface)というインターフェイスがあります。保有しているデータを外部のアプリケーションやプログラムから扱うための機能を提供するもので、有名どころは外部サイトで商品情報を表

示するAmazonのWeb APIがあります。I.B.MUSEUM SaaS でも、すでにこの仕組みを導入しています。APIで登録データを公開し、外部Web制作会社やアプリ開発会社に活用してもらうことで、Webサイトやアプリなどに情報を配信することができる仕組みとなっています。

APIを介した形でのデータ配信は、I.B.MUSEUM SaaS の範囲を超えた館オリジナルのサービスを構築できるのが魅力。すでに北海道東川町の「東川町文化財デジタルアーカイブ」で利用されているほか、来春公開される予定のプロジェクトも進行中。少し分かりにくいかもしれませんが、追ってどこかで詳しくご紹介いたします。



 **東川町文化財デジタルアーカイブについて**
http://www.waseda.co.jp/museum_report/higashikawa-bunnkazai-archive

 **ミュージアムの情報発信に関するアンケート 調査報告書**
<http://www.museummedialabo.jp/archives/469/>



I.B.MUSEUM SaaS 新機能情報



大好評の展示ガイドサービスを複数施設で利用可能に！ ポケット学芸員 2施設目以降無料サービス

アプリ内での 表示法を変える 2つの方法

2016年春のサービス開始から、全国80館を突破。現在もご導入館が増え続けているミュージアム展示ガイド「ポケット学芸員」ですが、館が急増したからこそ、ひとつ大きな課題が。というわけで、解決策として新たなサービスを提供することになりました。

前提～ポケット学芸員の仕組み

まず、「ポケット学芸員」の契約上の仕組みを改めてご説明します。ポケット学芸員は、クラウド型収蔵品管理システム「I.B.MUSEUM SaaS」の機能の一部です。I.B.MUSEUM SaaS をご契約いただければ、追加費用なくポケット学芸員をご導入いただけます。

ポケット学芸員は、複数の施設が相乗りするスマートフォン向けの展示ガイドアプリです。ご導入の各施設は、それぞれひとつの「コーナー」、あるいは「章」のような位置づけとなっており、アプリユーザは目次のような一覧画面から情報を

見たい施設を選びます。

まとめると、I.B.MUSEUM SaaS で運用されているデータベースがあれば、登録済みのデータを使って展示ガイドを提供できるという仕組みが、ポケット学芸員の基礎となっているわけです。つまり、【ひとつのデータベースに対し、ひとつの展示ガイド】。これが前提となります。

従来の複数施設導入方法の問題点

ひとつのデータベースに登録されているデータを「ひとつの施設の情報」としてアプリへと配信するわけですから、たとえば「本館と分館」のように複数施設の資

料(展示物)として分けたい場合、アプリ側では別施設として扱うことができません。では、どうするか。配信情報に複数の施設の情報があ、別施設であることを明確に伝えたい場合は、現状では施設名称を「本館／分館」のようにひとつにまとめたの表示となります。その上で、展示室内に掲出するガイド番号を「1番から100番までは本館の案内用、101番以降は分館の案内用」と分けるなど、手動スタイルの運用をお願いしてきました。

アプリ上での表示は、下に掲載した図②のような形になります。博物館と史跡公園がある場合、スラッシュで接続された形で表示されるわけです。

導入館急増で浮上した課題点

ところが、ポケット学芸員のご導入館が大きく増えたことで、利用可能な施設の一覧が見づらくなってきました。刻々と100館に近づく規模になってくると、名称だけでは目的のミュージアムが探しにくくなるのも当然です。

そこで、アプリユーザの現在地から近い施設を選択できる機能を追加。とても便利になりましたが、今度は別の問題が

発生しました。図②の場合、○○博物館と○○史跡公園が隣接しているのであれば問題ありませんが、互いに距離が離れている時に不都合が生じるのです。

たとえば博物館側を主体に登録していた場合、アプリ上では史跡公園も「同じ施設」と認識されます。すると、「公園の近くにいるのに地域のリストに表示されない」ということが起こり得るわけです。そこで弊社では、こうした事態を避けるために、解決策を講じました。



隣接した施設ならスラッシュでつなぐ併記でも問題なし。ただ、離れた場所の場合は注意が必要となります。

ポケット学芸員の「弱点」の解決策 2施設目のための専用DBを無償で提供開始！

本当に「独立した施設」として扱う必要がある場合のために、ポケット学芸員を利用した情報配信専用として【サブのデータベース】の展開が可能な環境を提供することになりました。

サブのデータベースで「別施設」に

メインとサブでデータベース自体を分離する。この方法の利点は、アプリ内でも完全に独立した別施設と扱える点です。リストで見ても別施設ですので、誰

が見ても混乱することはありません。また、「現在地から探す」ボタンでも、本館と別館の距離に関わらず、それぞれを単独の施設として認識。もちろん、施設紹介画面も別々ですので、それぞれの説明を掲載することができます。

ただし、このサブのデータベースには、弱点があります。それは、あくまでもポケット学芸員専用であるということ。メインデータベースでありI.B.MUSEUM SaaS 本体とは連動しないため、ポケット学芸員の大きなメリットである「データ

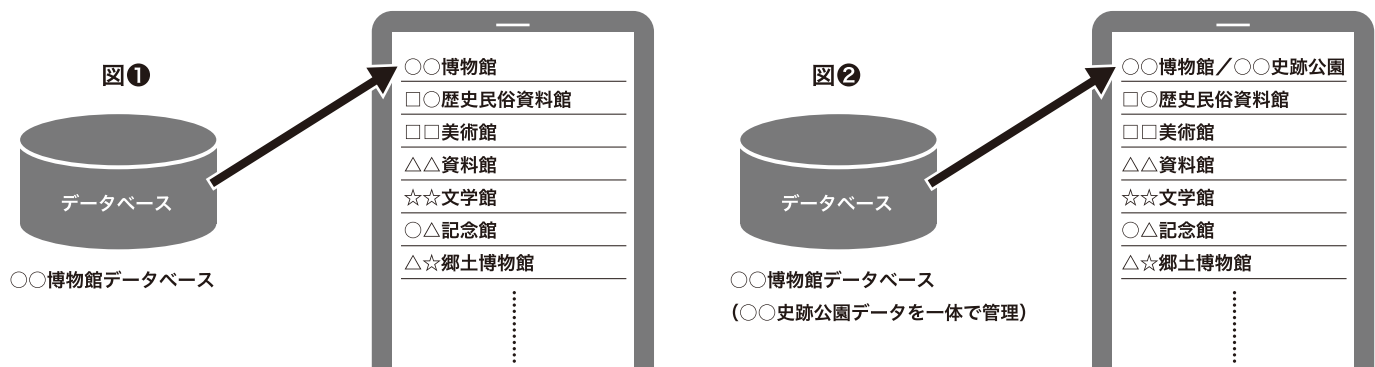
ベースに登録済みデータをそのまま配信情報へと流用する」という作業フローが使えなくなります。

2つの施設でポケット学芸員を使う場合、本館側は今まで通りですが、別館分のデータは専用データベースに改めてデータを登録する作業が発生します。図③をご覧になればお分かりの通り、【ひとつのデータベースに対し、ひとつの展示ガイド】という前提は変わりませんので、この点はどうぞご留意ください。

今回のポケット学芸員「2施設目以降無料サービス」は、いつでもご利用いただけます。ただし、I.B.MUSEUM SaaS のサポートページから申込書をダウンロードし、必要事項にご記入の上、ご提出いただくことになります。と言ってもさほど複雑な手続きではありませんので、まずは弊社担当までお気軽にご連絡いただければ幸いです。

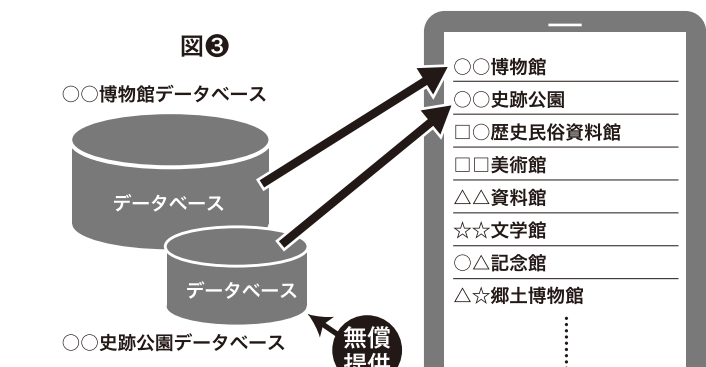
弊社 サポートページ
<https://welcome.mapapps.ne.jp/support>

【図1】 これまでの「ポケット学芸員」 単館表示と複数館表示の例



ひとつのデータベースで2つの施設を管理している場合、主体となっている側の施設しか表示されません。そんな時は、施設名をひとつにまとめれば表示は可能ですが、少々スマートさに欠けます…。

【図2】 これからのポケット学芸員 複数館表示の例



そこで、ポケット学芸員専用のデータベースを追加。これなら、完全に別に施設として表示することができます。